情報化時代の図書館を描く

両角光男
本間里見

1. 設計演習課題の背景

(両角光男)

インターネット等の情報通信技術の急速な発展は、「知」の創造や伝達の方法を大きく変化させつつある。大学図書館は、書物が登場して以来、大学における「知」のシンボルとして位置付けられ、その蔵書量の豊富さを競ってきた。さて家庭や教室のコンピュータから世界を相手に情報を受発信できる今日、大学図書館は書籍や歴史資料の収蔵庫としての役割に留まり、「知」の創造や伝達の場はサイバーな世界の中に溶解してしまうと考えるべきなのだろうか。

昨年夏、台湾の交通大学から、「情報化時代の建築」という共通テーマで設計競技に参加するよう誘いを受けたのをきっかけに、研究室の若手教官やＯＢと学生達にチームを組んでネットワークを利用した遠隔協調設計に挑戦してもらった。ここではその作品の一つを紹介したい。現時点では未だネットワークを介した設計コミュニケーションに制約があり、造形としての詰めが足りなかったとの印象は免れない。しかし熊本大学という身近な環境の中で彼らが思い描いた構想を通して、情報化時代における大学図書館像について考える一助としていただければ幸いである。

2.メディアを包み込む情報の帯◆INFOBELT◆

(本間里見)

インターネット時代に入り、図書館がサービスしなければならないメディアは、アナログとデジタルが混合した多様な形態が考えられる。さらに、大学という閉じたシステムから、地域社会と積極的に連携するオープンなシステムに進化するよう求められている。メディアを集め利用者に提供するのが図書館であるが、原点に戻って人と人、或いは人とメディアの自由な出会いを演出し、そこから新しいコミュニケーションを生み出す装置として設計した。

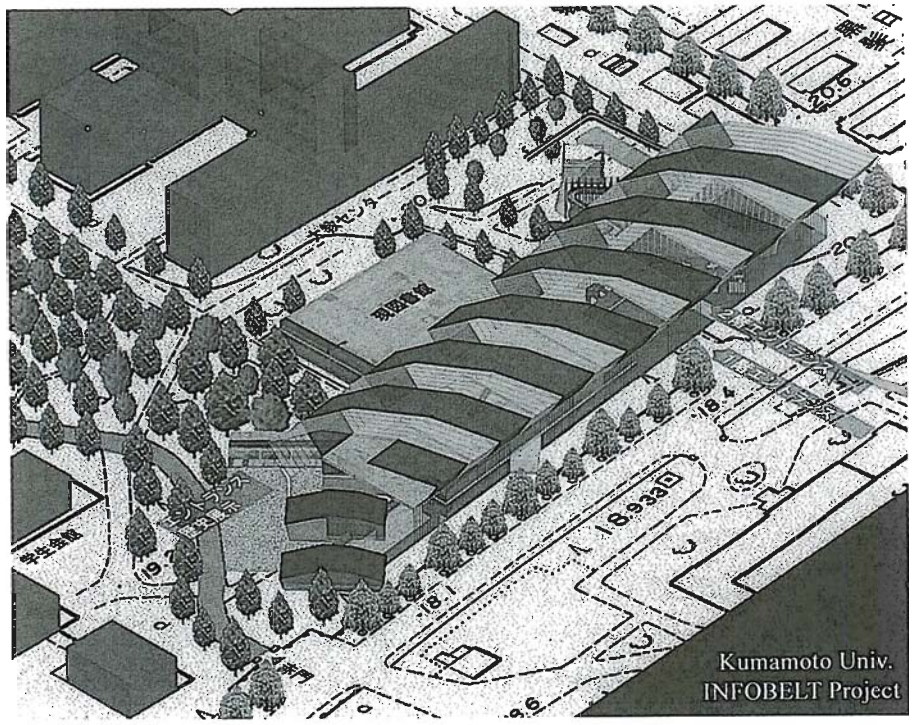
すなわち、①歴史資料からデジタル化した資料まで複数の情報メディアを融合させて、検索・閲覧が可能な情報提供機能、②歴史的価値の創造と伝承に必要な歴史資料の保存とメディアの変換機能、③地域住民と学生或いは大学関係者が共同の作業を通して、新たなビジネスを起こすための交流機能、④生涯学習センターとの交流機能、⑤マルチメディアを中心とした体感型プレゼンテーションホールの5つの機能をもつ複合施設である。

現図書館の南側に増築し、本館と連続した空間利用を考えた(図版①)。地上3階建て、100万冊の図書を保有すると想定した。地階には、70万冊を収納する集密書架及び貴重書・歴史資料、1階はレファレンスや一般図書・雑誌、2階は24万冊の専門書、3階はマルチメディア利用施設を配置した。各階にはそれぞれ、多様なスタイルで情報に接する閲覧空間を用意し、吹き抜けや階段・通路などで結んで連続感のある空間構成に心がけた。好きな時に、好きなスタイルで、好きなメディアを扱う空間、つまり「～しながら、～できる」といった、利用者の要望に柔軟に応える空間を提供する。

3階には、マルチメディアを扱うための大空間が広がっており、その中に個人作業用ボックス型のユニットが点在している(図版②)。これは、映像や音楽を中心に五感に訴えるコンテンツの創作と研究を行なう、マルチメディア対応の密閉型キャレルである(図版③)。デジタルコンテンツやマルチメディアを用いたユニークな研究を期待した。東寄りには、講義、講演会、会議などに使うマルチメディアホールを設置した。座席は全て可動式とし、様々なイベントに対応するよう計画した。360度パノラマ映像や立体映像を体感するマルチメディア・シアターとしても利用できる。また、可動間仕切りの設置で、展示場としての利用も可能である。

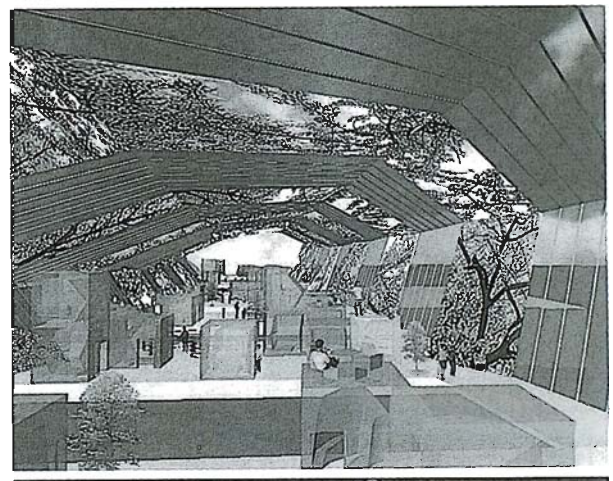
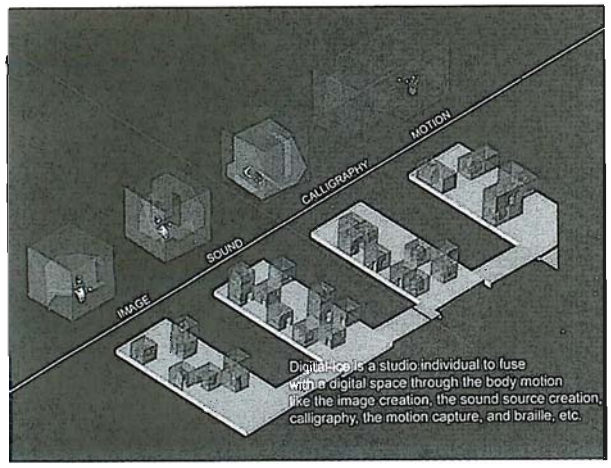
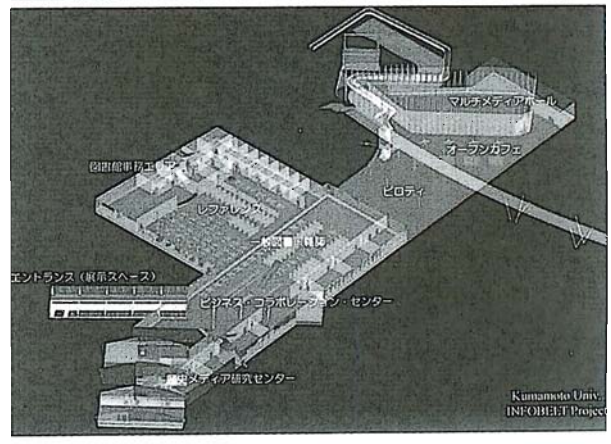
西側一階には、本学が保有する貴重書や歴史資料の修復や保存作業とそれらを利用した研究の場、それらをデジタルメディアに変換する作業を行う場、また一連の技術を教育する場として、歴史メディア研究センターも併せて計画した。併設の生涯学習センターは、大学の知的技術的ストックを活かした魅力的な講座を開講する。また、ビジネス・コラボレーション・センターは、学外の社会人と学生が集まってビジネスのアイデアを研究し、起業家を育てるようなパイロット的な機関となることを考えた(図版④)。

（もろずみ　みつお　工学部教授）
（ほんま　りけん　工学部助手）



図版①(上)
南西の方向から見た鳥瞰図

図版②(右)
3階透視図。壁面には環境映像が映し出されている。

図版③(下左)
マルチメディア対応の密閉型キャレル

図版④(下右)
1階の施設配置計画